

2022年3月13日（日）

宣教 「祈り・信仰・愛」

聖書：マルコによる福音書9章14節～29節

みなさん、おはようございます。

皆様と心を合わせて一日も早く、ウクライナへのロシア軍の攻撃が止むことを祈ります。

イエスは小さな者、特に子どもを愛されました。こどもの姿の中に神の愛の国を見ておられたのだと思います。ですから小さな子どもたちの苦しみはイエスご自身耐えることが出来なかったのです。今、ロシア軍のウクライナへの攻撃で子どもたちが犠牲になっています。攻撃で命を失う子どもたちや親元を離れて一人で他国へ避難する子どものテレビなどでの映像には胸を締め付けられる思いになっておられる人も多いと思います。一日も早く戦闘が止むことを祈らずにはおられません。

聖書のことばに聞きましょう。

今日の聖書の個所は、イエスが山の上から降りて来た後に麓で起こっていた出来事として記されているように思えます。

「汚れた霊に取りつかれた子をいやす」という奇跡の出来事です。

イエスとペトロ、ヤコブ、ヨハネの3人の弟子が山上から降りて来ると、他の弟子たちが律法学者たち、約2000年前当時のユダヤ教の指導者たちと議論をしていました。

そこで、イエスは「何を議論しているのか」とお尋ねになりました。

群衆の中のある者が「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません、と答えたのです。

また加えて言うには、

霊がこの子に取りつくと、所かまわず地面に引き倒すのです。

すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださるようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」と重ねて言いました。群衆は弟子たちが、病をもたらす霊を追い出せない事を言います。2000年前の古代では、このような病気は、今日で言えば、医学的には強度の癲癇ほっさを伴う病であると思われます。現代の医者の中にも、病気については薬は認めつつも薬の量の多さに頼ることを勧め

ない医者もいます。

イエスのそばに来た人々に対して、「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」と言われました。

さてここからです。

20:人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。

人々は、イエスに子どもを癒してほしいと思う人もいたでしょうし、中には、物珍しいいやしの業を見たいと思っている人たちもいたのです。そのような目つきの人々の中に病気の息子の父親もいます。病気に苦しむ、苦しんで来た、息子と父親は、病気であるがゆえの社会の現実の苦しみます。2重の苦しみます。

古代、病気の原因は悪い霊と考えられていたのです。その霊はイエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。おそらく今日でいう癲癇の発作だと思われます。ちなみにあの伝道者パウロも、癲癇の発作を持っていたと言われていました。わたしも昔、障がいを持つ幼児さんの療育施設で働いていた時、様々な形のほっさを持つ幼い子どもたちと出会ったことがあります。普段は、ほっさの起こっていない通常に生活しているのです。

イエスは、子ども見て、そこにいた父親に尋ねます。ここでは、父親が、イエスの前に立つのです。ここに私は心惹きつけられ、心の目が止まる思いなのです。母と子の関係は、良く言われますが、ここでは父と子の関係です。ここには母親は出て来ていません。父とこの関係に光があてられているかのようです。イエスはこの父親ひとりと向き合われているのです。父親も当然ですが、自分の子どものことで喜んだり、口に出さなくても、また逆に悩んだりするものです。

父親は自分の権威や価値観などは、子どもが成長して行く中で崩され壊されて行くこともあると思います。それはとても辛い経験ですが、神さまから、謙虚さを学ぶ経験ともなるのです。そして詩編119編71節にあるように「卑しめられたのはわたしのために良いことでした。わたしはあなたの掟を学ぶようになりました。」と告白できるように成長させられるのです。昔の口語訳聖書では「苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあな

たのおきてを学ぶことができました。」昔、出会ったリュウマチの患者の女性の方は、この聖句を愛唱聖句としておられたことを思い出すのです。

イエスは父親に尋ねます。一対一です。イエスは心からこの子の父親に向かわれ、心注ぐかのように深く強く向き合われたのです。

21:イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。」

22:霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」

この人は、「幼い時からです。」と語ります。この言葉からこの父親の長年の子への思いと苦悩の深さを感じます。イエスは、父親の正直に語ったことば、その一言を聞きもらされませんでした。その言葉は、「おできになるなら、」という言葉です。このことばに、父親の苦悩の深さと絶望を感じると共に、「おできになるなら、」と。ここには不信の力が支配しています。差別のある世間の力に支配されて苦しむ父親の心を見ぬかれたのではないかと思うです。父親の方も、変わらなければならないのです。心を解放されなければ、心はついに自由にならず平安にはならないのです。

23:イエスは言われた。『『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。』と宣言されました。このイエスの言葉は、ボクシングでいうところの、強烈なカウンターパンチとなりました。父親はイエスの言葉に、打ちのめされたのです。

24:その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」と。

このことばは、打ちのめされた、心悔い改めた者の言葉です。神の子イエスに出会った、神に出会ったこの人は、自分の弱さを示され、心から認めたのです。詩編 51 編 19 節「しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を 神よ、あなたは侮られません。」とあります。そのとおりだと思います。神さまは憐み深い方なのです。

「信じる者には何でもできる。」との言葉は、「信じる者に対しては何でも起こりえる」との意味に受けとめることができる言葉だと最近教えられました。

愛なる神が最善のことを起こされるのです。悪は断じて許せません。しかし、神はたとえ混乱と悪が起こっている中からでも最善を引き出される方なのだと信じます。神さまは切なる祈りに対して最善を成してくださる方なのです。

わたしは、現在のロシア軍のウクライナ侵攻の現実の中、神さまに奇跡を祈ることの必要性をある方の詩から強く示されました。紹介いたします。

アン・ウィームズ(Ann Weems)さんの詩です。

『もはや平和を祈らない』

戦争の縁に片足はもう入っている
もはや平和を祈らない
奇跡を祈るのだ

石の心が
優しい心へと変わり
悪意が
慈しみの心へと変わり
配備されているすべての兵士が
危険な場所から救い出される奇跡に
全世界が
驚いて膝をつくことを

すべて＜神が語られること＞が
骨をとって立ち上がり
不信仰の纏（まとい）を取り除かれ
力強い真理の中を再び歩み始めることを

全世界がともに座して
パンと葡萄酒を
分かち合うことを

希望などないと言う人もいる
けれども、わたしたちの信仰が躓(つまず)いたとしても
決して諦めることない聖なる愚か者たちに
わたしはいつも拍手を送ってきた

わたしたちは神に愛されているのだと.....
わたしたちは真に互いに愛し合うことができるのだと

もはや平和を祈らない

奇跡を祈るのだ

・ アン・ウィームズ(Ann Weems)

(訳) 西原廉太

人間の常識的理解を超えて愛なる神の善き働きは起こり得るのです。
病気の子どもも父親も、最善を成してくださる力を持った愛なる神さまの御手の
中にあるのです。イエスによって示された神の愛は、閉じてはいないのです。
未来に向け開かれているのです。

イエスの癒しの業は、いつも愛なる神さまの救いの業として行われました。

イエスは、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と
問う弟子たちに「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことは
できないのだ」と言われました。 祈りとは、ただ願うだけではなく、「神さま
の声を聞きながら生きること。」「主よ、お語りください。」との祈り。それは、
信仰から生まれ、愛に生きる日々、平和へと確かにつながっているのです。

主の平安を祈ります。